学長式辞

堂々と楽しく人生を歩もう

佐々木 重人

学部・大学院・法科大学院それぞれの課程を修了し、学位を取得された皆さん、おめでとうございます。保護者の皆さまには、感染防止対策上、ご臨席いただけず、誠に申し訳ありません。謹んでお慶びを申し上げますとともに、コロナ禍での本学の教育活動に物心両面でお力添えいただきましたことに対し、厚く御礼を申し上げます。

学部卒業生の皆さんは、この4年間をどのように振り返っているでしょうか。私個人の経験からしても、これほど大きな起伏を伴った年月を経験することは極めて稀でありました。

私は、皆さんの本学入学に際して、「在学中、大きく変化する専修大学」を体験できるとお伝えしました。その意図は、2020年の本学創立140周年に向けた学部・学科の新設・再編・移転と神田10号館の新築による新しい教育インフラづくりを一緒に体感してほしいという思いにありました。また、本学の21世紀ビジョン「社会知性の開発」の見える化のため、SDGsの実現に向けて積極的に取り組むと宣言しました。

ところが、20年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、予期せぬ新学期となりました。授業をオンライン形式で行うため、新学期の開始までに約1カ月間を要しました。皆さんには、オンライン授業を巡って、さまざまなストレスを与えてしまったと思います。この場を借りて、おわびしたいと思います。

コロナ禍での2年間を経て思うことは、教育活動以外でも、経済・社会・文化・スポーツ活動等の維持のため、人々が懸命に努力している姿を見て、改めて「持続可能な社会」を作り上げることがいかに重要で喫緊の課題であるかということでした。これから社会人となる皆さんにもこの問題意識を持ち続けてほしいと思います。これこそが「社会知性の開発」の実践にほかなりません。

本学の学風である「質実剛健」および「誠実力行」は、何事にも自分らしく自然体で、心身を鍛えながら、誠実に人生を歩むという誓いが込められています。ぜひ、本学で学んだことにプライドを持ち、堂々と楽しく人生を歩んでください。

SDGsの目標16は、「平和と公正をすべての人に」ですが、今、ウクライナで起きている悲劇を一刻も早く止め、世界の持続可能性のために何をしなければならないかを考える必要性を訴えたいと思います。一日も早く、ウクライナに平和が戻ることを祈りつつ、学長式辞といたします。（要旨）

卒業・修了おめでとう

総長祝辞

日髙 義博

学部を卒業される皆さん、大学院で学位を取得された皆さん、本当におめでとうございます。コロナ禍で通常の学生生活もままならないなか、無事卒業されることに対して賛辞を送りたいと思います。そして、感染症対策に伴う人数制限のため、式にはご臨席いただけませんでしたが、ご支援いただいたご父母・保護者の皆様に対しても厚く御礼を申し上げます。

日本武道館で一堂に会して卒業式を行うことは、大きな節目であるとともに、ここに臨んだ卒業生一人一人の心の中で、過去を振り返る材料となり、あるいは勇気をもたらすことになると思います。

私が本学を卒業したのは1970年。同じくここ日本武道館で卒業式がありました。そのときの総長、川島正次郎先生は卒業生に「泥にまみれた著名人になるよりも、世の人の地の塩となれ」という旨の言葉を残されました。川島先生といえば政界にあって「一寸先は闇」という言葉も残されています。現在の新型コロナウイルス感染症や世界情勢をみていますと闇に似たような感じを覚えますが、これからは「一寸先は光」と思って世の中で活躍してください。

「一寸先は光」の世界を

専修大学の21世紀ビジョンは、「社会知性の開発」です。専修人の生き方を世に示すためには、皆さん自身が社会の中にあって、社会に立たなければなりません。しかも立ち姿が大事です。その立ち姿とは自分の生き様、どう生きるかという問題であり、信義と礼節こそが、1880年の創立以来、創立者と卒業生が維持してきた立ち姿だと思います。

「社会知性の開発」には、しっかりした倫理観がないといけません。倫理観に対する考え方は人それぞれ異なりますが、「これは大切だ」というものを、皆さんは見つけていると思います。その価値観を大事にし、これから社会に出て専修人として活躍されることを祈ります。それによって専修大学の大学力は向上し、社会の信頼は集まり、そして循環ができて多くの学生が門をたたき、また卒業していくことと思います。

「一寸先は光」の世界を切り開くことができるかどうかは、皆さんの双肩にかかっています。社会環境を破壊するのも人間、それを立て直すのも人間です。その中にあってきちんと立ち、立ち姿を見せて社会をリードしてください。これからの健闘を祈ります。（要旨）

揮毫　松尾 治 文学部准教授（書家）

卒業生・修了生ならびに保護者の皆様おめでとうございます。
校歌の終盤に「我等が行く道　盤石なせり　我等が行く手は光に充てり」と高らかに歌い上げる詞があります。皆さんの前途を祝して書かせていただきました。

理事長祝辞

松木 健一

卒業生並びに修了生の皆様、本日は誠におめでとうございます。

地球の環境は常に変動し続け、時に人類では防ぐことのできない災害を発生させます。11年前、東日本大震災が発生し、先日、3月16日には福島県沖を震源地とする最大震度6強の地震が発生しました。被害にあわれました方には、心よりお見舞い申し上げます。

一方、ロシアのウクライナ侵攻による目を覆いたくなる惨状のニュースが日々飛び込んできています。現在もさまざまな地域で紛争が繰り返されているという世界の動きを直視していかなければなりません。

また、今般の新型コロナウイルス感染症拡大によるパンデミックが日本のみならず世界に与えた衝撃は計り知れません。皆さんも、描いていた、また計画していた学生生活に大きな影響が生じたのではないでしょうか。

本学では、いかなる状況においても「授業を止めない」「学生支援を止めない」という方針のもと、授業、学生支援を急遽オンラインで行うこととしました。戸惑いもあったかと思いますが、ご理解をいただきましたことに感謝申し上げます。そしてこのような状況の中、皆さんは不安や葛藤を抱えながらも自らのキャリアや、目指す目標について深く考え、到達するための方法を模索するとともに、これに真剣に向き合ってこられました。その努力に敬意を表します。

現在、第4次産業革命、ソサエティ5・0の波が押し寄せています。情報技術の発達は、生活環境や企業での就業形態を含め、社会活動の在り方そのものに多大な影響を与えようとしています。将来の予測が困難で、ボーダーレス化が加速した今こそ、社会の閉塞感を打ち破り、社会を変革する機動力を持っている皆さんが飛躍する好機です。

授業やゼミナール活動、課外でのスポーツ活動、ボランティア活動等を通して、本学が21世紀ビジョンに掲げる「社会知性（Socio-Intelligence）」の知力と人間力を十分に備えられたと思います。卒業・修了後、それぞれの道は異なりますが、自らが信ずる道を歩むことを祈念するとともに、社会で存分に力を発揮され、社会の屋台骨を支える人材として、活躍されることを心から期待しています。多くの方々からいただいたご恩を忘れることなく、さまざまな事象への関心と学び続ける姿勢を持ち、人間性あふれる心豊かな専修人としての人生を歩まれることを切に願い、祝辞といたします。（要旨）

心豊かな専修人として